

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第15号

平成27年7月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

太平記に見る正成、正行親子

二人が直接かかわる件は、たった2か所

義を諭し伝えた桜井の別れ

鎌倉・京都・吉野を舞台とした一大歴史絵巻、そして60年にわたる南北朝時代の激動の歴史を描いた「太平記」。

楠木正成、楠正行父子を語るとき、必ず出てくる歴史スペクタクル、太平記であるが、ではこの本の中でこの親子のやり取りが描かれているのはどこか。

それは、たった2か所しかない。もっと正確に言えば、たった1か所のみなのである。

世に名高い「桜井の別れ」の場面のみである。尊氏によって送り届けられた正成の首級と対面するくだりがあるが、父、正成はすでに亡き人であった。

勉誠出版「完訳太平記」にこの件を見てみよう。なお、本書は「太平記」の全現代語訳で、底本として「新潮日本古典集成『太平記』」、「日本古典文学大系『太平記』」（岩波書店）を参考にしたとある。

巻十六 10 楠正成、兵庫に下向のこと

正成は今回を最後の合戦と思ったので、嫡子の正行が今年十一歳で父に付き従っていたのを、思うところがあると、桜井の宿(大阪府三島郡)から河内へ戻そうとして、教訓を言い残した。

それは、
〈正成〉「獅子は子を産んで三日経った時、数千丈



(「丈」は約三^{ふた}寸)の断崖からその子を投げ捨てる。その子に獅子としての器量が備わっていれば、教えなくとも宙返りして、死ぬことはないと言われている。ましてそなたはすでに十歳を過ぎている。この一言が耳に残ったならば、私の教訓に背かないようにせよ。今度の合戦は天下分け目の一戦になると思うので、この世でそなたの顔を見るのもこれが最後だと思う。この正成が間違いないと討死したと聞いたならば、天下は必ずや將軍・尊氏の治世になるものと心得よ。だが、世がそのようになっても、一時だけの命を助かろうとして、長年の忠節を捨てて降参することがあってはならない。我が一族や若い家来の一人でも生き残っているうちは、金剛山(大阪府と奈良県の境)の辺りに籠り、敵が攻め寄せてきたならば、養由(楚の人)のような弓の名手の前にも命を懸けて立ち向かい、義臣・紀信(項羽との戦いで高祖の身代わりとなった人物)のように忠節を尽くせ。これがそなたの行う第一の孝行となるであろう」と涙ながらに言い聞かせて、それぞれ東と西へ別れ

たのであった。

巻十六 20 楠正成の首、故郷へ送ること

尊氏卿は、正成の首を取り寄せられ、
〈尊〉「朝廷でも、個人的にも、長い間親しく付き合っ
ていたこともあって哀れだ。後に残された妻子も、今一度、
この死に顔をさぞや見たいと思っているであろう」

と言って、彼の故郷へお送りになった情けは尊いもの
であった。正成の未亡人と子の正行がこれを見て、彼
がこの度兵庫へ出立した時、さまざま言い残していった
ことが多かった上に、今回の合戦で必ず討死するであ
ろうと正行を留め置いたので、この出立を最後の別れ
だと以前から覚悟はしていた。しかし、顔かたちを見れ



ば、間違いなく正成のものであるけれども、目を閉じ、
色もすっかり変わった顔を見ると、悲しみの思いが胸の
うちに満ち、嘆きの涙を抑えようがない。今年十一歳に
なった正行は、父の首の生きていた時と似ても似つか
ぬ有様を、また、母の嘆きのとどめようもない様子を見
て、流れ落ちる涙を袖で抑え、持仏堂(仏像を安置す
る堂舎)の方へ向かった。これを母が不審に思い、す
ぐに妻度(建物の四隅にある開き戸)の方から追っ
て行って見た。すると、父が兵庫へ向かうときに形見と
して残した菊水の紋の入った刀を右手に抜き持ち、袴の
腰を押し下ろして自害しようとしていた。母は急いで走り
寄り、正行の腕にすがりついて、涙ながらに言ったこと
には、

〈母〉「『梅檀(せんたん)は双葉より芳し』(梅檀は双葉

の頃から芳香を放つことから、大成するものは幼くして
優れている、意)と言われている。そなたは幼くとも父の
子であるならば、これほどの道理を知らぬことあるま
い。子供心にもよくよく訳を考えてみよ。亡き父が兵庫
へ向かった折、そなたを桜井の宿(大阪府三島郡)か
らここへ帰し留めたのは、自分の菩提を弔われようとい
うためでは決してない。腹を切れと残し置いたものでも
ない。たとえ、自分は命運尽きて戦場で命を失うとして
も、主君・後醍醐帝がどちらかにいらっしゃると伺ったな
らば、生き残った一族、若い家来たちを養っておき、今
一度合戦を起こして、敵を滅ぼし、帝を再び皇位にお
つけ申し上げよ、と言い残したのだ。その遺言を詳しく
聞いて、その内容を私にも語った者がいつの間に忘れ
てしまったのか。こんなことでは、父の名誉も失われてし

まい、帝のお役に立ち申し上げ
ることがあろうとも思えない」

と泣く泣く叱りつけ、押し留め
て、抜いた刀を奪い取れば、
正行は腹を切ることもできず、
礼盤(らいばん: 仏前で導師
が上がる台)の上から泣き崩
れ、母とともに嘆き悲しんだ。

それ以降、正行は、父の遺
言と母の教訓を胸に刻み、肝
に銘じながら、ある時は、童ら
を打ち倒し、首を取るまねをし
て、「これは敵の首を取ったの
だ」と言い、またある時は、竹
馬(枝葉の付いた笹竹にまた
がって遊ぶ道具)に鞭をあてて、
「これは將軍を追い撃ち申し上

げるのだ」などと言って、たわいのない遊びにまでも、も
っぱら父の遺言を果たすことだけを考えて暮らす、その
心の内は恐ろしいものであった。

(挿絵は、如意輪寺発行「楠木正行公一代記」より)

親と子の日本史

歴史上の有名な親と子が織りなす日本史をまとめた産
経新聞社発行の「親と子の日本史」(平成13年初版)に
は36組の親子が登場する。

そしてそのトップに、“尊氏と戦え” 忠義こそ孝行”
と副題のついた「楠木正成と正行」が取り上げられてい
る。この親子は日本を代表する親子である。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)